

ホルヴァートの小説『神なき青春』

—反ファシズムと信仰のテーマを巡って—

伊 藤 富 雄

I

1937年8月、ホルヴァートは亡命先のザルツブルク近郊ヘンドルフで小説『神なき青春』を完成させる。10月、アムステルダムでこの小説が出版されるや、一大文学的センセーションを巻き起こし、フランス語、ポーランド語、ハンガリー語などにあいついで翻訳される。ホルヴァートは10月24日付の友人クソコル宛の手紙で『神なき青春』のこうした評判の良さをいささか興奮気味に伝え、トーマス・マンがツックマイアーにこの小説が「この数年来最高の書」であると書き送ったこと、またツックマイアーがマンの雑誌『基準と価値』にこの小説の書評を書く予定であることも伝えている。¹⁾ トーマス・マンが『神なき青春』を称賛したとされるツックマイアー宛の手紙の存在は確認されていないが、フィッシャー社のフィッシャーは1937年11月14日付のマン宛の手紙でホルヴァートが『神なき青春』をマンに贈呈しなかったことを残念がるとともに、この小説が最近彼に深い感銘を与えた本であるとしている。²⁾ またクラウス・マンは、この小説は冒頭の一行から結末の一行まで、第三帝国を支配していた邪悪なるものに対する戦慄と恐怖の念に満たされており、「抒情的に簡潔で、劇的に緊張感のある、間接的な時代批判小説」であると評価している。³⁾ しかしこの小説の評判の良さ、評価の基準および内容は詳しく見れば一様でない。つまりこの小説の政治的内容、ことに反ファシズムの内容を強調し、それ故に反ファシズム文学として評価する者、ファシズムの大衆基盤の社会・経済的基盤、心理的素因を、正確に描いたとして評価する者、あるいは政治的内容は重視せず、もっぱら形而上的、道徳的葛藤に目を向けて評価する者、あるいはホルヴァートの新たな文学的可能性が切り開かれたと評価する者などさまざまである。それは小説の受け入れ側の期待、思惑が異なっていることに起因する。その意味で言えば、この小説以前の民衆劇よりも時代・政治批判、とりわけファシズム批判が弱いとして、『神なき青春』を否定的に捕らえる者す

らいるのである。ところでホルヴァートは10月26日付のクソコル宛の手紙で次のように書いている。「....この小説を今読み返したところです。私も気に入ったと言わざるをえません。その際、三気付いた点があります。つまり私は意図した訳ではないのに初めてファシスト的人間を（教師の姿で）描いたということです。この人物を懐疑の念が苛んでいます—言い換えればファシズム国家における人間を描いたということです。」⁴¹すなわちホルヴァートはこの小説の出来栄に自らも感心しながら、小説の評価と密接に結びついている「ファシズム国家における人間」を描くのを意図したわけではないと語っているのである。ではホルヴァートが意図したわけではない「ファシズム国家における人間」はどのように描かれているのだろうか。そしてまたこの小説は反ファシズムの文学と呼べるのだろうか。あるいはそもそもホルヴァートはこの小説で何を意図したのだろうか。それらを明らかにするのが本稿のねらいである。

II

この小説においてホルヴァートのいう「ファシズム国家における人間」はいかに描かれているのか、またこの小説は反ファシズムの文学と言えるのか否かを具体的に検討する前に、この小説が書かれた時期に至るまでのホルヴァートの政治的態度、特にファシズムに対する態度を簡単に整理しておきたい。

ホルヴァートは1920年代の後半からヒトラー政権が誕生する1933年までの間に発表した一連の民衆劇の中で先鋭な時代批判、社会批判を行っている。その中でも1930年の『イタリー風ガーデンパーティー』、1931年の『ウィーンの森の物語』ではナチスとおぼしきファシストを登場させ、ファシズムの危険性に対する警告と受け止められる描き方をしている。そのため『イタリー風ガーデンパーティー』発表直後からナチスによる激しい中傷、攻撃を受けている。ヒトラー政権誕生直後の1933年2月、突撃隊によって両親の家の搜索を受けたホルヴァートは身の危険を感じてドイツを去り、オーストリアのザルツブルクからウィーンへと亡命生活に入る。この年の5月、ホルヴァートの親しい友人でもある作家のオスカー・マリア・グラーフは第三帝国の焚書と作家の迫害に抗議する電報をイタリアのラゲルサで開かれる国際ペン・クラブの大会に送ることにし、ホルヴァートにこの抗議電報に署名するよう求めた。しかしホルヴァートは「私はオーストリア人でもないし亡命者でもない」⁵¹と署名を断ってしまう。当然のことながらグラーフはホルヴァートの臆病さを激しく非難し、亡命者新聞に反ファシズム的態度が不鮮明であるとしてシュテファン・ツヴァイクやアルフレー

ト・デーブリンの名前も挙げながら「突然ハンガリー国籍を意識し始めたドイツ人のクライスト賞受賞者ホルヴァート」への辛辣な批判を行う。⁶⁾

ホルヴァートはグラーフの非難には一切反論せず、それからの数カ月も政治的亡命者及び「第三帝国」との間に中立的な態度を取り続ける。

1933年9月に亡命雑誌『新ドイツ双紙』の創刊号でグラーフ、アンナ・ゼーガースなどがナチスとの闘いを明らかにした時も、オーストリアの批判的知識人の決議文や抗議文の下にホルヴァートの名前は見られない。それどころかホルヴァートはクラウス・マンが亡命先のアムステルダムで出版した亡命雑誌『集合』を受け取った後、クラウス・マンの補佐役であったランツホーフへ「すでに3月にあなたに申し上げたように、私は政治とかかわっている雑誌とは原則的にもはや一切共同の仕事をするつもりはありません」⁷⁾と書き送っている。

1934年3月、ハンガリー国籍だったホルヴァートは再度ナチ治下のドイツに舞い戻る。その理由は明白ではないが、経済的困窮の打開、ドイツ国内での自作の上演の可能性を求めるためだったと思われる。ホルヴァートはベルリンへ到着した1ヶ月後の4月19日にはすでにベルリンのある舞台出版社と喜劇『天国めざして』の出版契約を結んでいる。しかし演出家ハインツ・ヒルベルトが『天国めざして』をベルリンで上演しようとしたとき、ナチスの新聞は一斉に批判を行う。これに対してホルヴァートは「私の作品（『登山鉄道』）は共産主義的ではなく、反共産主義的です...だからマルクス主義の新聞はわずかな例外を除いて私をあざけり、中傷したのです...ピスカートルやブレヒトの仲間も私に反対しました...私はソヴィエトが支配していたハンガリーから1919年に両親と共に逃亡せざるをえなかったのです...私を共産主義だと非難するのは従ってグロテスクなだけです」と弁明している。⁸⁾ さらに6月、ホルヴァートは先の出版社を通じて宣伝省へのとりなしを依頼し、次のような手紙を書いている。「ドイツの国民革命勃発の時期、およびそれから1934年4月半ばまでの時期は外国で暮らし、働いていました。その間、ドイツや政府に反対するような文章を発表したり行動を取ることは断固として拒否してきました。私はいかなる抗議の声明にも署名したことはありませんし、それ故オーストリアのマルクス主義的な新聞のすべてからひどい言葉を浴びせられ、中傷されました...私は両手を広げて迎え入れてくれることを期待してはいません。しかし力の許す限りドイツの再建に協力したいという願いが拒まれるとすれば、それは私にとって極めて悲しいことです。」⁹⁾ こうした努力が実って1934年7月1日、ホルヴァートはナチ傘下の「ドイツ作家帝国同盟」に加入することになる。こうしてホルヴァートはナチ治下のドイツで公に活動するための重要な前

提条件を満たすことになる。

このようにホルヴァートの1933年2月のオーストリア亡命から1934年3月のドイツへの再帰還の状況をたどれば、彼は作家としての名譽心と経済的困窮のためにナチ体制の同調者、支持者となったとの印象を免れえない。しかしホルヴァートのこうした不可解な政治的態度を理解する手助けとなる彼自身のメモが残されている。その中で彼は自ら体験した社会における芸術の意味を覚めた目で分析し、「賤民」に支配された世界に於ける演劇活動に関するドラスティックな考えを述べ、さらに自己の樂觀主義的な態度を弁明している。「我々は賤民が自らを権力者だと思い込んでいる過渡期にいる。精神的営為は蔑まれ、禁じられている。芸術は権力者の配下に下るよう求められている。愚かな世界観が支配し、最もましな場合でも狂気の世界観が支配している...世界は賤民の汚物の中に沈んでいる。そして演劇はその泥沼から聳えるほど高尚でもない。連中は自らその身を汚してしまったのである。連中は言葉を蔑すみ、文学を嘲けり、いい作品など一つもない、と叫んでいる。そのような賤民が支配しているというのに、妥協など一切しないという者ほど頭のおかしな者がいるだろうか。」¹⁰⁰これはファシズムの支配する野蛮な社会に生きていた当時のホルヴァートが、「賤民の汚物」の中に沈んでいる世界の中で引き出さざるをえなかった結論と理解される。非人間的な社会では明らかな抵抗運動の道をとることは無意味であるというホルヴァートの基本的な考えは、1933年までの彼の反ファシズム的態度と1933年以降のそれとの顕著な矛盾を説明しているのかもしれない。興味深いことにこの「賤民」の概念は小説『神なき青春』の中でもファシズム成立を説明する概念として取り上げられている。

ベルリンとミュンヘンでの併せて18ヶ月の第三帝国滞在の後、ハンガリー国籍のホルヴァートもついに最終的に帝国を去らざるをえなくなる。ウィーンに戻ったホルヴァートは映画のシナリオを書くなどして糊口をしのぐが、経済的に追い詰められていく。1935年12月、喜劇『一押し、二押し』がウィーンで上演されるが失敗に終わる。1936年、ウィーンからザルツブルク近郊に移ったホルヴァートは戯曲『戦場から帰ったドン・ファン』、『男のいない村』、『最後の審判の日』を完成させる。そしてこの年の終わりに小説『神なき青春』の執筆にとりかかるのである。

次にこの小説で「ファシズム国家における人間」がどのように描かれているか見ることにして。この小説は語り手が主人公を兼ねており、この主人公を越えるパースペクティブは存在しない。従って読者は主人公の目を通して時代状況、政治・社会的状況が知らされることになる。語り手でもある主人公はファシズムに支配された国で

「歴史と地理」を教えている教師である。この教師がファシズム体制とはイデオロギー的にも心情的にも距離を感じ、反発を感じていることはすぐに知らされる。彼は小説の冒頭近くでクラスの一生徒が「植民地はなぜ必要なのか」というテーマの作文で人種差別を肯定したことに触れ、生徒全員を前にして「ニグロだって人間だ」と発言する。あるいはラジオによって宣伝される「民族の利益」の追及に関しても、それは「犯罪者」の言い分であり、自分たちは全員そのような「ベスト」に感染してしまっていると考え。ファシズムの指導者である「賤民の親王」の誕生日に人々が家の窓に旗を飾り、町中を行進していくのを冷ややかに見つめる教師は、彼らを「馬鹿者の命令に従っている性格薄弱な連中」だと見なす。しかしながら教師は、そのようなファシズムのイデオロギーに支配され、体制に唯々諾々と従っている生徒たちにファシズムの本質を明らかにし、真実に目を向けさせようとはしないし、ましてや自ら体制と直接的に対決し、体制を変革していく立場をとろうとはしない。「ニグロだって人間だ」と発言したために、生徒や生徒の親たちの反発を受けると、そのことで「パン」の糧を失うことのないようにと、政治的問題では二度と目だたないようにと決心する。つまり、ファシズム体制にはイデオロギー的にも心情的にも距離を感じ、反発を感じてはいるが、結果的にはその体制順応の態度によってファシズムに手を貸してしまうのである。この意味では教師はホルヴァートが民衆劇で批判的に描いてきた「小市民」の一人である。すなわち、明確な階級意識に欠け、自分の置かれている状況が変化しないことをひたすら願う者、自分の見たいものだけに目を開き、聞きたいものだけに耳を貸してしまう者、そして結果的には「ブルジョア階級のボディ・ガード」、ファシズムの信奉者となっていく「小市民」の一人である。しかしこの小説では民衆劇とは異なり、教師の 인간의成長、発展、「小市民」性克服の過程が描かれている。ただしその「小市民」性克服の契機となるものは反ファシズムといった政治的なものではないことは注目に値すると言える。主人公の教師を初めとしてこの小説にはそもそも政治的抵抗を行う人物は一人として登場しない。生徒たちの予備的軍事訓練が行われる山村の製材工場の閉鎖で「失業者」が大量に出たことは触れられるが、閉鎖に反対したり、抵抗した労働者が存在したような気配は全く感じられない。生徒の親たちにしてもすべて体制側に属した人間として描かれている。教師が密かに生徒の「小箱」を開け、日記を盗み見たことに端を発する殺人事件の裁判で、「小箱」を開けたことを証言し、真実を述べることによって小市民性を克服した教師はファシズムの国を去り、アフリカへ向かうことになる。しかしそれはファシズムの具体的現実を背向け、なんら政治的抵抗を行わないまま逃避するのだとも言える。小説の中で唯一組織された体

制反対派になりつつある生徒たちのグループですら、厳密な意味では政治的抵抗運動は行っていない。ファシズムの支配するような非人間的な社会では明らかな抵抗運動を行うことは無意味であるという、先に記したホルヴァートのメモに見られる政治的態度が反映されていると言える。

さらにホルヴァートはファシズム体制と独占資本とが密接に結び付き、ファシズム体制において資本主義が完全なものとなったことを示し、「社会的不平等」の現象を強調して描いている。生徒たちが軍事訓練を行う村にある唯一の工場はコンツェルンのものであり、しかも現在は閉鎖しており、そのため村人は極端に貧困であり、子供たちの3分の1は栄養失調に陥っている。「青白い老けてしまった顔」をして窓辺で人形の色付けの作業をしている子供たちは教師の心に深く焼き付き、それ以降の筋の展開の中でも教師の心を離れることはない。そしてそれが教師の小市民性克服の一つの契機ともなるのである。「神」を巡っての神父と教師の論争でも、教師は富める製材工場の側に立ち、貧しい窓辺の子供たちの側に立たない教会を責める。

さらに殺人事件の犯人を最終的に追い詰めていく段階でも「社会的不平等」の犠牲者である村の子供たちのことが重要な役割を果たしている。教師に追い詰められた犯人のTは自殺を遂げるが、コンツェルンの重役夫人であるTの母親は教師が村の子供たちや休業した製材工場に言及した時、重大な告発と感じて息子が犯人であることを認めるのである。「青白い老けてしまった顔」をしている子供たち、閉鎖された製材工場、高級住宅街と貧民地区、こうした「社会的不平等」を象徴する形象が再三繰り返され、そのような不平等を生み出している体制、社会への批判が強調される。さらにこの小説ではファシズムによって若者たちが受けざるをえなかった影響、状況が極めて印象深く描かれている。ファシズムのイデオロギーに支配され、扇動に躍らされている若者、自分の頭で考えることを忌み嫌っている若者、体制へやすやすと順応し、「ネジや歯車」、それどころか「爆弾」になりたがっている若者、およそ基本的なモラルの欠落してしまった若者、こうした若者の姿を通じ彼らの冒険心を悪用し、戦場に送り込もうとするファシズムの手口、その外部へと向かう攻撃性と内政的な組み入れの機構が暴かれている。以上のようにこの小説を見てくると、この小説が「ファシズム国家における人間」を描いており、ファシズムの実態の一部を暴いて見せているのは事実である。しかもこの小説が書かれ、発表された1937～1938年という時代・政治状況を考えるならば、反ファシズムの困難な闘いを行っていた亡命者たちを中心にこの小説を反ファシズムの文学として歓迎したことは想像に難くない。しかしながらファシズムに言及されるのは小説の前半部分に限られ、後半ではほとんど言及されてい

いこと、反ファシズムの政治的抵抗を行うものが一人も描かれていないこと、さらにファシズムを克服するための明確な展望が示されていないこと、また主人公がアフリカに渡っていくのも言わばファシズムの現実には背を向け、なんら政治的抵抗を行わないままアフリカに逃避していくとも取れることなどを考え合わせれば、この小説は、ファシズム体制の打倒や弱体化を直接的に目指す反ファシズムの文学、ないしは反ファシズムの闘いを促し、闘いへの参加を呼びかけるという明確な政治的意図を有した文学とは呼ぶことはできないであろう。そしてまたホルヴァート自身もそのようなことを意図した訳でないこともすでに見たきたとおりである。ただしこの小説の主人公様、ファシズム体制にイデオロギー的にも情動的にも距離を感じていたホルヴァートは、後で述べるように政治的ではない反ファシズム克服の可能性をこの小説で示していると思われるのである。

ところでホルヴァートがこの小説で描いてみせたファシズム社会は彼が自ら体験したナチ治下のドイツを想定しているのであろうか。彼はこの小説ではナチスの指導者、あるいは組織を名指して述べるのを避けているかのように思える。例えば総統を指すドイツ語 Führer の代わりに賤民の親王という意味の Oberplebejer を、親衛隊を指すドイツ語 Schutzstaffel の代わりに、護衛という意味の Leibgarde を用いている。さらにはナチスのユダヤ人弾圧に見られる人種差別も小説ではニグロに対する差別に、ナチスの領土的野心も東ヨーロッパではなく海外の植民地に変えられている。さらに生徒の軍事訓練が行われる山岳地域の説明などからすれば舞台はドイツというよりオーストリアに近い。1937年の時点でも自作がドイツの読者に読まれることを願っていたホルヴァートは、ナチスの検閲を逃れるため、あからさまにナチスと受け取られるような描き方を避けたのではないかと考えられる。そのために時代を示す正確な年月を入れるのも避け、隠喩的表現も随所に取り入れたのであろうし、その結果としてファシズム一般を描いたかのような結果になったのである。しかしながらホルヴァートの思惑がどうであったにせよ、この小説は1938年3月7日ゲシュタポにより有害図書と規定され、回収、押収されることになる。

III

ユルゲン・シュレーダーは伝記や心理分析的概念を用い、ホルヴァート後期の作品は個人的、政治的「退行」の文学的表現であるとしている。つまり「自らはコミットしない観察者の恐るべきリアリズム」がこの小説では犯罪的であると暴かれており、1933年までの「民衆劇」に見られる冷徹な、観察者の手法が否定され、「罪悪コンプ

レックスと自らを断罪する行動」に到っているというのである。そしてこの小説は主人公の教師と作者であるホルヴァートの「内的自己審判」である、と言う。¹¹⁾ 確かにこの小説の教師と作者ホルヴァートにはさまざまな類似点が見られる。両者は同じ世代に属し共に独身であるという外的な事実とともに、社会や政治に対する態度にも共通するものが見られる。また教師が生徒の日記を盗み見ることになる「小箱」のシンボルは他人の内的秘密への許されざる介入とも取ることができる。ファシズム体制に嫌悪を抱き、軽蔑しながらも小市民的保身のために体制と折り合っている教師、しかし後には人間嫌いのシニシズムとは縁を切り、最終的には自らの罪を認め、「真実」を愛する者と連帯する教師の人間の発展は、1933年以降のホルヴァート自身の批判的自己省察と理解することも可能であるように思われる。

しかしこの小説でライトモチーフ的に繰り返される「罪」の認識と「神」を求めての宗教的問題への傾向は「退行」ではなく初期の作品に、時として潜在的に存在していた倫理的、道徳的問題の深化の試みと見なすべきであり、さらにホルヴァートの文学的発展ととらえるべきである。初期の作品において時にアイロニカルに、また時に否定的に神や信仰の問題は取り扱われてきたし、民衆劇では小市民たちのカモフラージュされた攻撃性を暴くために神や信仰が持ち出されてきた。しかし教会批判を行い、信仰に対する不信の念を示しながらも完全には信仰を捨てることのなかったホルヴァートは1936年に書いたドラマ、即ち『神なき青春』の前年に書いた『最後の審判の日』で神の恩寵としての贖罪と救済に身を委ねる主人公フデーツの姿を通して信仰への回帰を示している。¹²⁾ そしてホルヴァートは神と信仰の問題を再度小説の形で取りあげ、深化させたのである。

この小説を信仰のテーマから見れば、「戦争の時に神を見捨てた」主人公が生徒の殺人事件を契機に再び神を見だし、信仰に回帰し、アフリカのミッション・スクールの教師となって旅立って行く物語ということになる。ではこの教師がいったんは見捨て、そして再び見だした神とはどのようなものなのであろうか。そしてホルヴァートがこの時期にこのような宗教的テーマの小説を書いた目的は何だったのであろうか。

小説の冒頭、主人公の教師の34歳の誕生日に両親からお祝いの手紙が届けられる。両親は「全能の神がお前に健康と幸運と満足とをお授け下さらんことを」と書き送っている。この両親の信仰心はそれまでの民衆劇で小市民が自己の利益を守るために口にしていた、伝統的、慣習的なそれである。両親の望んでいるのは「老後の年金のついた安定した職」に息子が止まり続ける小市民的平穩に過ぎない。だから教師が生徒の「小箱」を開けて日記を盗み見したことに端を発する殺人事件の裁判で真実を話し、教

師の職を失うことになった息子に両親は「あんな余計な小箱のことを話した」と腹を立て、自分たちのことを考えてはくれなかったと怒るのである。同じ名前と呼ばれながら教師が最終的に見いだす神と両親のそれとは同一ではない。「僕が思うに、二人とも日曜には教会に行っているが、いまだに神があゝの二人のところに住んではいないらしい」、と教師は語っている。「神はきっとお助けになるでしょう」という決まり文句で一旦は両親に書いた返事を破りすてるのは、両親の神と自分の求める神との相違を明らかにするためでもある。教師が見捨てた神とは両親の口にする、伝統的、慣習的な神であることがまず分かる。

13章の『人類の理想を求めて』で教師の考えている神の概念が明らかになる。キャンプ地の司祭館を訪れた教師は司祭と神を巡って議論する。そして貧しい村の子供たちの側に立たず、富める者の側に立つ教会の態度を責める。司祭は村の子供たちは「もう神を信じてはいない」と語るが、教師は、神は貧困に苦しむ子供たちを助けようとしないうちに、どうして子供たちに信仰心を求めることができるのか、と詰め寄る。「社会的不公平」を黙認するような神など信仰に値しないのである。教会が「富める者」ではなく「貧しい者」の立場に立つこと、「可能な限り現世の幸福を実現する」ような国家の側に立つこと、それが教師にとっての信仰の前提なのである。「世界大戦」を許すような神、「社会的不公平」を黙認するような神、そのような神は信仰に値しない。このように考える教師にとっての神とは正義や公正と同義であるように思われる。さらに殺人事件の裁判で「神」が教師に直接語りかけ、「証人として証言し、私の名前を口にするのなら、お前があゝの小箱を開けたことを、隠さずに言うのだ」と命じ、教師は真実を語る決心をする。この教師の姿は「内なる声」に耳を傾け、自らの罪を認めることになった『最後の審判の日』のフデーツの姿と重なってくる。こうして教師にとっての神はさらに良心や真実を求める心とも重なってくる。このような神の概念はホルヴァート自身の経歴、彼自身の教会とのかかわりから生まれてきたものであると考えられる。ホルヴァート自身は敬虔なカトリック教徒の家庭に生まれている。しかしながらギムナジウムの頃、宗教教師と深刻な対立を起し、さらに後年には正式にカトリック教会を脱会している。その直接の理由は不明だが、ホルヴァートの作品でみる限り、カトリック教会のありかたに対する不信の念にあると思われる。『ホテル眺望荘』や『会議をめぐる』では神はお金と同義であるという痛烈な批判が見られ、『ウィーンの森の物語』では神に最後の助けを求める哀れな、弱い立場の女主人公に対して教会は一方的にその権威に従うよう求めるだけである。『信仰 愛 希望』では女主人公は神による救済の希望など抱くことなく、自ら命を断ってしまう。さら

には未完の『レーゲンスブルクの女教師』では大衆の搾取や抑圧を黙認し、人間に敵対的な社会秩序の維持に手を貸しているカトリック教会に対する女主人公の激しい憎悪と抵抗が描かれている。このような作品を書いてきたホルヴァートが「信仰」への回帰を示すとき、その「信仰」の対象となるべき神がどのような存在かは明らかであろう。「僕が神を信じていなかった時期は終わった。今では神を信じている」、そう語る教師の信じる神とは「社会的不公平」を正す正義や公正と同義であり、良心や真実を求める心と置き換えられるものである。そしてホルヴァートはこのような神への信仰により、政治的ではない反ファシズム克服の可能性をも示したのではないと思われる。そのことを裏付ける人物として司祭がいる。彼はいささか謎に満ちた人物として描かれており、「左遷」されてこの山村に来ているという。しかし「左遷」の理由は述べないし、教師も問いただすことはない。また小説の最後でこの司祭は私服で教師を訪れ、「刑期」が終わったこと、「民間人」に戻ることを伝え、さらに教師にアフリカに渡ってミッション・スクールの教師になるようにと勧める。この司祭の「左遷」された理由はしかし教師との二度の対話から伺えるように思われる。最初の信仰を巡っての対話の中で「所有関係のまったく新たなコントロール」の必要性に同意する司祭が「社会的不公平」を是正しようという考えを有していること、また二度目の対話でニグロも人間ですよと主張し、ファシズムの人種差別には反対であることが分かる。つまり司祭は潜在的な反ファシズムの人間であり、慣習的、伝統的な信仰や教会の在り方に疑いを抱いている（ないしは、いた）ことが分かる。そのために罰を受け、山村に「左遷」させられたものと考えられる。このような司祭を登場させることによりホルヴァートは、「貧しい者」の立場に立つ教会の可能性、あるいは又教会を中心とした、政治的ではないファシズム克服の可能性を示唆しようとしたのではないと思われる。

さてこの小説の内的な筋である教師の「信仰」への回帰を一層印象深いものにするための文学的手法として様々な隠喩的表現、象徴的表現が用いられている。こうした表現はライトモチーフ的に回帰することによって小説のエピソード的構成とは反対に内的統一を強調している。先の教師が直接神と対話する場面で煙草屋の老人は「この事件は関係する者皆に罪があるらしいですわい」と語っているが、教師も含めた登場人物たちを巻き込んでいる「罪」は聖書の「ノアの洪水」の隠喩で示される。第2章は『雨』という表題が付いているが、ここで既に「ノアの洪水」と人間の罪のことが語られている。「雨」は神の罰としての雨である。殺人事件が明らかになる前日、つまり神が現れる前日にも大雨が降り、曹長が「こんな調子で降り続けると、ノアの洪水に

なっちまう」というのも従って決して偶然ではない。さらに「信仰」を得た教師がアフリカに渡る最終章の表題“Über die Wasser”は内容的には明らかに『海を越えて』という意味であろうが、「海」を表すドイツ語を用いずに「水」の複数形を用いているのは「罪」としての「ノアの洪水」を乗り越えたこと、つまり教師が救済されたことの隠喩でもある。さらにまた第6章の表題は「魚の時代」となっている。この魚のモチーフも再三繰り返されるが、やはり人間の「罪」とかかわっている。教師の知人のカエサルは言う。「寒い時代がやってくるぞ。魚の時代が...そうすると人間の心は魚の顔のごとくに動かなくなるのだ」。つまり魚は罪の意識の欠如、感情の冷酷さ、冷淡さを象徴している。『魚』と表題のついた第29章の裁判の場で犯人の特徴を聞かれたエヴァは「覚えているのは、明るい丸い眼をしていたことです。魚みたいにと答えている。さらにこの魚の象徴によって教師自身の罪も明らかにされる。「魚」の眼をしているのは生徒のTだと気付いた教師はTを問い詰める。しかし逆にTは教師のほうが「魚」の眼をしているし、学校では「魚」というあだ名をつけられているのだと切り返す。「魚」の象徴によって教師とTの共通性も示される。つまり教師はその傍観者の態度、さらには「小箱」を開けたことをすぐに告白しなかったことにより生徒Nの言わば精神的殺人者となり、その意味でTの共犯者とも言えるのである。Tに対する教師の憎しみは観察者であり、アウトサイダーであった自分自身への嫌悪の現れだと見ることも可能である。また「魚の時代」とはカエサルの言う「寒い時代」、すなわち後期のホルヴァートの作品に見られる寒さ Kälte のモチーフでもある。「寒い時代」とは邪悪なるものが支配する時代であり、邪悪なるものとは外的にはファシズムであり、内的には信仰の喪失、良心の欠如である。そして良心に基づいて裁判で真実を述べ、「信仰」への回帰をとげた教師がアフリカへ旅立つことになるのは、寒さからの決別であるの言うまでもない。アフリカへの旅立ちは単に空間的だけではなく、精神的な隔たりを示しているのである。また教師が自らの「罪」を認め、新たに「神」を見いだすことになる契機はキャンプ地で生じた殺人事件であるが、この殺人事件の犯人追及も「魚」の目をした犯人、あるいは『奴は餌に食いつかない』、『おとり』、『網の中』といった表題で隠喩的に示されている。

さらに「目」の隠喩がある。神と直接話を交わし、信仰を再び得た教師は考える。「お前は同じ家に住んではいる。しかし以前より高い所にいるのだ。別の地平にいるのだ。別の住まいにいるのだ」(傍点筆者)。また上に述べた裁判所近く煙草屋の老人の声が神の声に転じたとき、その声は「別の声」と表現されている。そして同じように「別の目」と呼ばれる目がある。法廷で真実を話した教師はエヴァの目が自分に注が

れているのを感じたが、同様に真実を告白した時のエヴァの目は現実の「泥棒の目」ではなく「別の目」だったと書かれている。そして小説の最後で息子の T の罪を告白した母親の目も「別の目」であったことがほのめかされている。教師は言う。「あれは彼女の目ではなかった - 故郷の森にあるほの暗い湖のように静かな目だった...神はそのような目で私たちの方をごらんになるのだ...かつて私は、神は陰険で、人の心を射るような目をしていると考えていた。しかし、それは違う。神とは真実なのだから」。「別の目」とは神の目であり、神の望む真実を述べる者に宿る目であることは明らかである。さらにこうした「別の目」を有しているのが共に女性であること、また T の母親の目、そしてエヴァの目も共に一字一句同じ「故郷の森にあるほの暗い湖のように静かな目だった」と形容されていることは暗示的である。つまりこの小説における神は女性（母親）、故郷、森、湖といった庇護し、優しく包みこんでくれるもの、優しさや懐かしさ、さらには自然への回帰といったイメージと結びついている。これはホルヴァートにおける神の問題を考えると、極めて示唆的である。

IV

これまで見てきたようにこの小説は一方で「ファシズム国家における人間」を描いてはいるが、中心となっているのは神や信仰を巡ってであり、隠喩的、象徴的表現によってもそのことは明らかである。さらに付け加えるならばこの小説のタイトルもそのことを裏付けている。つまり『神なき青春』というタイトルは一つには生徒を中心とした若者の神の不在、信仰の不在を示していると理解される。もっとも小説の中では若者ではなく、教師が神を発見し、信仰にいたる過程が描かれてはいる。教師が信仰に回帰するのは若者が信仰を有していないからだとも言える。また主人公の教師が「戦争の時に神を見捨てた」と語っていることを考えれば、教師は青春時代に「神を見捨てた」のであり、その意味でタイトルは教師の神の不在の青春時代を指しているとも理解できる。ホルヴァートの友人でもあったフランツ・ヴェルフェルが見事に言い当てているように『神なき青春』の作品の価値は一人の人間が「宗教的な罪の認識に目覚めていく、その比類のない、新鮮な描き方にある」¹³⁾と言えるであろう。

注

- 1) Horváth, Ödön von : Gesammelte Werke. Kommentierte Werkausgabe in Einzelbänden. Hrsg. v. Traugott Krischke unter Mitarbeiter von Susanne Foral-Krischke. Frankfurt a.M. 1986, Bd. 13, S. 158.
- 2) ebd. S. 179f.
- 3) Krischke, Traugott (Hrsg.) : Materialien zu Ödön von Horváth. (=edition suhrkamp 436) Frankfurt a.M. 1972, S. 131f.
- 4) Horváth, a. a. O., S. 158.
- 5) Schnitzler, Christian : Der politische Horváth. Untersuchungen zu Leben und Werk. Frankfurt a.M. 1990, S. 138.
- 6) ebd. S. 139.
- 7) ebd. S. 140.
- 8) ebd. S. 144f.
- 9) ebd. S. 145f.
- 10) Hell, Martin : Kitsch als Element der Dramaturgie Ö. v. Horváths. Bern 1983, S. 283.
- 11) Schröder, Jürgen : Das Spätwerk Ö. v. Horváths, in: Ö. v. Horváth. Hrsg. v. T. Krischke. Frankfurt a.M. 1981 (suhrkamp taschenbuch materialien 2005), S. 133ff.
- 12) 拙稿「罪と贖罪のドラマーホルヴァートの『最後の審判の日』について」(立命館言語文化研究第3巻第1号, 1991年) 参照。
- 13) Krischke, a. a. O. S. 134.

使用テキスト

Horváth, Ödön von : Gesammelte Werke. Kommentierte Werkausgabe in Einzelbänden. Hrsg. v. Traugott Krischke unter Mitarbeiter von Susanne Foral-Krischke. Frankfurt a.M. 1986, Bd. 13.

参考文献

Horváths "Jugend ohne Gott". Hrsg. v. Traugott Krischke. Frankfurt a.M., 1984 (suhrkamp taschenbuch materialien 2027)

ホルヴァート著作集Ⅱ 三修社 1987年

要 約

1937年、ホルヴァートは亡命先のヘンドルフで小説『神なき青春』を完成させる。アムステルダムでこの小説が出版されるや、一大文学的センセーションを巻き起こし、各国語にあいついで翻訳される。この作品は「ファシズム国家における人間」を描いてはいるが、しかしファシズム体制の打倒や弱体化を直接的に目指す反ファシズム文学ではない。この小説は『最後の審判の日』同様ホルヴァートの信仰への回帰を示すものであり、同時に政治的ではないファシズム克服の可能性をも示唆するものである。